

大阪府発達支援拠点等のあり方に関する こどもWG、成人WGの論点別主要意見

資料2-5

No.	論点	主な意見
1	通所支援事業所の現状	放デイのスタッフの教育ができていないのか、研修がきちんとできていないのか疑問。発達障がいをよく理解していると思えないような言動もあると聞いている。
		支援の質が低い放デイが増え、自治体の窓口とも良くない関係ができあがっている。親のストレス軽減のために預けたいから利用するケースが相当数あり、お子さんにとって良い方ではない。発達支援拠点のような、親子と一緒にサポートしていける体制があり、家庭環境も含めたしっかりしたアセスメントがなされた上で療育が進んでいくような事業所が生き残り、宿題を見て、おやつをあげて、テレビを見せるだけというようなところは淘汰される仕組みに持っていきたい。
		事業所に定着する職員が少ない。機関支援に行っても、次に行ったときは前の職員がいないということも多く、毎回最初からとなってしまうこともあるので、今は事業所から新人に向けて伝えてほしいと言われるようなことも多い。職員の育成の仕方について助言するような入り方が本来は必要かと思うが、事業所や職員自体がそこまで育っていないのが現状。
2	高年齢児の個別療育について	9歳以上の高年齢児への個別療育をはじめとした支援については、府の事業の枠組みで個別療育を提供するのか、もしくは市町村から委託を受けて実施している個別療育の枠組みで実施をするのか。後者であれば相当丁寧な説明が必要で、圏域によっても状況が異なる。
		圏域によっては、定員が未就学児で埋まってしまい、そこにプラスで高年齢児となると別枠になってしまう。
3	学校への機関支援について	今は小中学校個体への支援という形になっているが、実際に各市町村の教育委員会に足を運んで、ニーズを聞きながら機関支援の入り方について話をしている。そのような中で、市町村の教育の質の向上を考えると、できれば教育委員会と連携できるような形が取れると、面的な支援につながっていくのではないかと考えている。
4	市町村等との連携	府の委託事業でありながら、市町の放デイや児童発達支援事業所に機関支援を実施しているので、市町の理解や協力体制をどう作るのかということが福祉事業所を訪問して感じてるところ。また、個別療育については、府の委託から市町村に移管され、今は市町の委託を受けて実施しているところではあるが、なかなか市町の施策の中に入っていくにいくというのを感じていて、自立支援協議会への参加も発達支援拠点としてなかなか入りにくい。市町村の教育施策という枠の中で個別療育や、機関支援においても、どう入っていけばいいのかなというのが、今実施しているところ。
		市との連携や市との関わりというところにすごく難しさを感じている。発達支援拠点というふうには大阪府から委託を受けている事業ですが、なかなか事業に対する理解が得にくいところがありますので、市との関係づくりが、今後の課題と考えています。 また、保健師との関係も難しい。保健師が見ることのできる年長以降で支援が途切れ、不登校になって発達支援拠点に繋がることもある。その中には、保健師から「様子観察で」と言われているようなお子さんも多い。どう連携していくかも見据えた保健師研修を実施してほしい。
5	行政の縦割り	保育士、幼稚園教諭、保育教諭など、就学前の子どもにかかわる支援人材の継続的な育成ということで、教育委員会の方につながって、機関支援をすることができるんですが、保育所の方は福祉なので、支援の内容は伝わりやすいのですが、幼稚園の方がなかなか言いづらいというか、先生方も困っているけども、方法がなくて苦労されているというか、四苦八苦されているのかなということを訪問に行かせていただいて保護者の方から聞いている。教育委員会所管の幼稚園に対しては、各市町村教育委員会に入っていくことで、何とかできないのかなと思ったりしています。

No.	論点	主な意見
6	発達支援拠点と他の通所支援事業所との違いの明確化	発達支援拠点ができた平成17年当初は、事業所数も今ほど多くはなく珍しい存在であったが、平成24年の法改正により市町村に移行して以降、児発と放デイの仕組みを使っているのに、名前は「拠点」というところの差別化が難しくなった。事業所の中には、保護者同伴で保護者研修もやっているから違うのかなと分かっているところもあるが、市町村から見ると、給付費から実施しているというところで、あまり違いを分かっていない。大阪府発達支援拠点という名前を背負っているのであれば、発達支援拠点が自助努力で持ちこたえている間に、府からもはっきり差別化を図ってほしい。高齢児の支援や教育を含めた機関支援も成果は見られるし、新しい事業所や療育をやっていない市の学校からも機関支援の申し込みが来るなど浸透してきているので、府のバックアップをしっかりと欲しい。
		このワーキングに参加されている方々は、発達支援拠点が地域の事業所より1ランク上にあることをよく理解されているが、現場の市町村の職員は、発達支援拠点の仕組みを理解していないことが課題。市町村の窓口業務をやっているような人が当然のことのように知っているくらいにして欲しい。周りの事業所等との差別化が図られないことによって発達支援拠点が疲弊してしまうようなことはあってはならない。地域の事業所や、市民、府民、誰でも大阪府がこのような仕組みで実施しているということが分かるようにして欲しい。
		久しぶりに当ワーキングに参加したが、随分と発達支援拠点の役割が重くなってきていると感じている。高齢児の支援、教育との連携、事業所に学校を合わせた数を一つの事業所が担うというのはどうしていくか、知恵を出していかないといけない。一定数の実績を上げてきているが、質の方はどうなのか。個別療育が、ただのマンツーマン療育として浸透してしまっているが、家族を支援するというのが個別療育であると考えている。1年間という期限はありつつも、場合によっては、継続的に話を伺いながら支援し続けるということが個別支援だと思っているので、そういった位置づけを明確に示すことができれば、一定評価はされる。国からも市町村が実施する児発センターの機能強化のことを言われているのなら、発達支援拠点と児発センターとをうまくリンクさせていく必要がある。
		地域の自立支援協議会や、サービス利用計画を立てる相談支援事業所への周知がまだできていないところもあるので、もう少し連携できるような体制が必要。
7	児童発達支援センターとの役割分担	（療育と機関支援の）2層構造で支援しているというところ、立付けがしっかりしていないと役割を果たすのは難しい。個別療育の委託料の14万円から17万円への値上げも難しい市があるなど、市町村での位置づけが難しい。 どこの市町村も事業所の支援の質の確保は課題に感じている。児発センターが事業所の研修をやっているところも多いので、コロナで実施できていなかったり、内容は児発センターの一存となる中で、研修内容の質の担保ができていないところもあるのでは。府の機関支援事業の中に研修も入っていたが今は無くなっており、児発センターが実施する事業所の連絡会の枠組みの中で、発達障がい理解を促す研修ができないか打診し、何とか枠組みができそうなどところもある。各拠点でそのような形で研修の機会を持つことができればと考えている。 国の検討部会の報告書の中で、児発センターのあり方がより専門的になることを踏まえると、児発センターが担う役割は、ずっと発達支援拠点が担ってきた役割と重なる。今後の役割を考えると、児発センターと一定連携し、児発センターへのスーパーバイズ等、発達支援拠点が関わっていくことができると、市町村の中の仕組みとしてうまく機能していくのではないかと。
8	アクトおおさかと発達支援拠点の連携	アクトおおさかでは市町村に通ってコンサルを行う地域支援力向上事業を実施しているが、今年度から発達支援拠点とも連携しながら市町村に入っている。事業内で実施する研修や、打ち合わせ、事業説明の際にその圏域の発達支援拠点も同行しており、少しずつ連携しながらできていると実感。市町村のコンサルをする上で、大人はアクト、子どもは拠点と区切るのには難しく、市町村も子どもから大人まで全てのところで課題を持っている。ライフステージが繋がっている中で、アクトだけでコンサルするのは難しいところもあるので、拠点と一緒に入れるとお互いの強みが活かせる。1年だけでは人材育成の研修をしても定着しないので、市町村の人材育成のシステムづくりと関係者のネットワークのシステムづくりを市町村と一緒にやっていかなければならない。
9	家族支援の充実	発達支援拠点の保護者研修でメンターを活用したことがあり、その際に市を通じてメンター派遣の依頼をした。そうすると、メンターが良い取組だということを市にも知ってもらえ、翌年から市の方でもメンターを活用するようになった。研修として発達支援拠点がやっていたことが、市でも家族支援に役立ててもらえるようになった良い例だと思う。発達支援拠点が積極的にペアトレやメンター活用を行うのは、小規模市町村の家族支援や、発達支援拠点に來れない親の支援にもつながるので、今後もこのような形が広がっていけば良いと思う。
		メンターから親御さんや支援者に体験談を話していただくことによる普及啓発や理解促進の効果は大きい。コロナで活用件数が減ってはいるが、ニーズや問い合わせは増えているので、引き続き親の会とも協力してしっかりとこの事業をやってきたい。
10	医療と福祉の連携	医療機関の受診の中で、医師から発達支援拠点についての情報提供があり、発達支援拠点につながったということも結構あり、情報が伝わり、浸透してきているのかなという実感がある。